

ってるじゃん♡♡そんなにオナニー気持ちよ  
かったんだ？♡」

「ちが……っ」

「うーそはよーくないなー♡」

「おッッッ♡♡♡」

ズリョッッ♡♡♡バイブを乱暴に抜き取られ  
♡陽気な蛭川はビクビク♡腰をしならせ続け  
る私に立てと命じる。

「次は何させようかな～♡あっそうだっ！」

「おほッ♡おッッ♡♡おおおッッ♡♡」

「いい子♡いい子～～♡そのままに<sup>またびら</sup>股開き  
スクワット皆さんに見てもらおうね～～♡

♡」

ズチュッ♡ズチュッ♡ズチュッ——♡

目の前には都庁を含む夜景が広がり、後頭部で両手を組んだ恰好のまま、背後からの衝撃に私は耐えるしかない♡

ズチュッ♡ズチュッ♡ズチュッ——♡

「おんッ♡おッ♡♡おほお…ッ♡」

照明をすべて消し去った暗いオフィスの中、私は自分の席のすぐ後ろで蛭川に犯されていた。

「そう♡ボクちょっと背え低いからさ♡君ががに股開きでそうやって♡かがんでてくれるとありがたいわ♡」

「ほッ♡ほッ♡おほお…ッッ♡♡」

脚の付け根を開いたままですること、穴が通常より広がっている♡そんな力が入らない無防備おまんこに♡ズチュッ♡ヌチュッ♡♡グチュッ♡——蛭川の極太チンポが容赦なく出入りする♡

「ボクねっ♡チビだけどっ♡チンポだけはっ♡この通りっ♡なんだよねっ♡気に入ってっ♡くれたかなっ？♡♡」

「ひん`う`ッッ♡♡」

ジャラッと首輪の鎖を引っ張られ♡息がつかると同時におまんこもきゅううんッ♡♡前後する蛭川を締めつける♡ガクガクガクッ♡

滑稽なほど腰が夜景に向かって突き出される

♡♡はしたなすぎるスクワット♡♡♡

「ほらっ♡ほらっ♡おまんこにじゅっぽ♡じゅっぽ♡ボクのチンポっ♡挿し込まれる結合部っ♡皆に見られてるよおっ？♡♡嬉しいねえっ？♡♡」

「ンおッ♡おッ♡♡おんッッ！♡♡」

上半身だけはきちんとスーツを纏い、下半身はソックスと革靴だけの裸というだけでも充分恥ずかしいのに♡ズチュッ♡ヌチュッ♡グチュッ♡こんなの♡♡見られたら♡♡

「も…♡やめ…っろお…！♡♡おッ♡おッ♡か、かかり、っちょ……おッ！♡♡帰